

立原正秋

流れのさなかで



女の愛とは？ 真実とは？

母であることよりも、妻であることよりも、
“女”であることにこそ……。愛に
すべてを賭ける華麗な女の人生。

毎日新聞社

¥490

流れのさなかで

原正秋

毎日新聞社

流れのさなかで

昭和四十六年一月二十日 第一刷
昭和四十六年二月二十五日 第二刷

定価四九〇円

著 者 立原正秋

発行者 星野慶栄

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋一
〒五三〇 大阪市北区堂島上三ノ三

〒六三三 北九州市小倉区紺屋町セノ三〇七
〒四〇〇 名古屋市中村区堀内町四ノ一

印刷 ■ 図書印刷／製本 ■ 大口製本

■ 検印省略 ■ ©一九七一 立原正秋

目次

第一章	寒 かん	蟬 せん	五
第二章	藪柑子 やぶかんじ		五
第三章	春の枯葉		一〇四
第四章	夏菊		一五四
第五章	落葉		二〇四

第一章 寒 蟬

一

大方葉の落ちつくした三本の櫟^{けふぎ}だけが庭園のなかでひととき丈高く、その梢^{こすえ}で茅蜩^{わくらし}が鳴いていた。

「先生。あれ、学生時代に先生から教えて戴いた寒蟬^{かんせん}じゃございませんかしら」

末乃^{すえの}は櫟^{けふぎ}をゆびさしながら尾高教授をふりかえった。かなかなと鳴いている蟬^{せみ}の声は、十一月はじめの和^{なご}んだ暮方の空に消えいり、いのちの儚^{はかな}さを思わせた。

「ああ、そうだね。……寒蟬^{かんせん}枯木^{こぼく}を抱^{かか}ぎて鳴き尽して頭^{こうべ}を回^{まわ}らさず。へ俊寛^{しゅんかん}だったな」

尾高教授は梢を見あげて答えた。秋の末、茅蜩^{わくらし}は、枯木にすがりついたまま、死ぬまで鳴き続ける、という意味で、末乃は、これを、中世文学の謡曲^{うたぎょく}の時間に尾高教授から習っ

た。いまから十四年も前のことである。

「そろそろ戻りましょうか」

「そうだね。もう、みんなあつまつた頃だろう」

二人は庭園を横切り、同窓会が開かれる部屋に戻った。

母校の文学部で江戸文学を講じているかつての同級生の山辺要一から、母校の校友会館で同窓会をひらくから、と電話をもらったのは、十日ほど前であった。末乃は、電話をもらったとき、来し方の年月をふりかえってみて、ある苦さがこみあげてくるのをとどめ得なかった。山辺は二年前に助教授になっていた。同級生のなかで彼だけがときどき末乃の店に現われた。そのとき山辺の話では、これから毎年秋に同窓会をひらくが、かつての国文科の教授達をまいねん一人招くようにしたいということであった。

会場は日本間で、部屋にはいったら十七、八人の同級生があつまっていた。女子は末乃をいれて三人であった。

「よう末乃さん。俺は学生時代あんたに惚れていたが、他の男にあんたを攫さらわれたときには、二昼夜泣いたものだ」

いきなり声がとんできた。学生時代にはボクシングばかりやっていた遠海謙六とくみである。わらい声があがった。おもい出せない顔もいくつかあった。

「卒業したのが三十五人だったから、十八人あつまればいい方だろう」

山辺が言った。

文学部を出ていながら、文学の仕事に携わっているのは数えるほどしかなかった。山辺の助教授のほか、高等学校の国語教師が四人、出版社に勤めている者が二人おり、このうち一人は歌人だった。そして小説家が一人いた。同性の高木幸江は中学校の教頭職にあり、いまひとりの河辺広子は医者との奥さんになっていた。ほかに、材木会社の社長、段ボール箱製造会社社長、螺子^{ねじ}会社の重役、運送会社の重役、というような文学とは縁のない職についている者もいた。肥った者もあり、痩せた者もいた。下腹が突き出て頭髪がうすくなってきた者もいた。学生時代、芝居が好きで芝居ばかり観て歩いていた神山は、舞台俳優^{俳優}になっていた。一カ月ほど前、この神山と詩人の石山が、大磯に居を構えている小説家の更級^{さらしな}を訪ねたときに、今日の同窓会の話が持ちあがったそうであった。

「末乃さんが料亭をやっているとは知らなかったな。俺はてっきり教授夫人になっていると思っていたが」

酒がまわってきたとき遠海謙六が言った。末乃は、山辺から今日の会の知らせをきいたとき、来し方の年月をふりかえってみて、ある苦さがこみあげてきたが、いまこうして昔の仲間に再会してみると、過ぎ去った年月はただ茫々^{ぼうぼう}としていた。末乃は、わずか三年間

で結婚、出産、離婚を経験してきたのであった。

「みんな、来年か再来年は四十歳になるんだらう」

と誰かが言った。

「四十にして惑わず、なんて、ありや嘘だ。俺は惑っているよ」
誰かが応じている。

男達はみんな元気がよかった。末乃は、三十八という自分の年齢を考え、女の盛りは疾うにすぎている、と軀のなかを風が吹きすぎて行く感じがした。儚くとも、死ぬまで鳴き続ける寒蟬の方が、苦痛がないだけ幸福に思えた。

「文学とは縁のない仕事をしているのが多いが、どういうんだらう、これは」
誰かが言った。

「あたしやいまも寄席にかよっているから、学生時代と同じだよ」

と答えたのは、材木会社の社長の所田正二郎である。

「なんだい、そりや？」

「あたしやね、寄席でよく山辺に会うよ」

山辺助教授は学生時代から落語の研究をしていた。

いま、ここで、十四年間をいっきよに縮めたものがある、と末乃は思った。

「末乃さんの家は以前から料亭だったのかい？」

尾高教授が末乃をみて訊いた。

「ええ」

「離婚したのか？」

遠海が無遠慮に訊いた。

「そうはつきり訊くものじゃないわよ」

末乃はわらいながら答えた。

「そうになると、俺は昔の恋情をよみがえ甦らせてもいいわけだ。あの当時、末乃さんは、俺達にとってはクレーブの奥方と同じだったものな」

「遠海。奥さんに言いつけるぞ」

詩人の石山がくちをはさんだ。

「なんだ、おまえ。このあいだのませた酒をかえせ」

ほんとに男達は元氣だ、と末乃は高木幸江と河辺広子と女だけに通いあう話をしながら思った。そういえば、ラファエツト夫人のヘクレーブの奥方レを読んだのも学生時代であった。読んでみろ、とすすめてくれたのは遠海であった。わたしは、クレーブの奥方のように、男からおもいをよせられている幸福な女ではない、と末乃はふっと荒涼とした思いに

おちていった。

校友会館の庭園に水銀燈がとり、末乃は手あらいに席を起って廊下に出たとき、櫛の梢を見あげたが、寒蟬の鳴きごえはやんでゐた。枯木にすがりついたまま夜を越し、明日また鳴くのだらうか、それとも、今夜のうちに命が絶えてしまうのだらうか……。このとき末乃の裡を、女の哀れさと儂さが緬^ないまぜになつて縛^もれていった。十三年前に別れて去つた夫から、あいたい、という意味の手紙を受けとつたのは、四日前であつた。

二

料亭中津は平河町の一角にあり、正午から店をあけていた。中津という店の名は、末乃の郷里である紀州の日高川ぞいの中津からとつたもので、末乃はしかしこの郷里にかゝつたことはない。東京で生まれ、東京の水で育つてきたままであつた。

正午から店をあげるのは、平河町近辺にある会社の中堅どころ以上の社員が、昼食をとりにくるからであつた。そして夜は宴会の席が主となる。

客は、末乃の着物姿がよく似合うと言う。

「おまえさん、小股の切れあがつた女になるな、着物をきると。いい女だ」

着物をきるときもコルセットをつけるから、尻があがつてみえる。それで小股が切れあがつた女にみえるのなら、おやすい御用だと思う。

「このあいだ洋服を着ていましたな。あなたは洋服の方が似合う。すらっとした脚がよかったな。着物ではあの脚は見えません。これからは洋服にしないさい」

という客もいた。

客はみんな末乃を美人だとはめてくれた。事実、江戸小紋などを着ると、それこそ小股の切れあがつた凄艶な女になるのであった。面長で髪が濃いから、よけいそう映るのであった。末乃はそれを知っていた。

末乃は姿見の前で納戸色の小紋を着ながら、きょうこれから藤村雄三に再会してどうしようというのだろう、と自分のなかを視つめた。十三年前に別れたきり会っていない男だった。別れてから三年間だけ、子供の養育費だけはきちんと送ってくれた。四年目にはいった年、再婚したからもう養育費は送れない、と伝えてきた。末乃は金には困っていないかった。

蟬

寒

藤村は、当時、官立大学の文学部の助教授で、よく中津に食事にきていた。たいがい夜の宴会で、昼間くることはなかった。料亭の娘が国文学を学んでいるので、末乃は客から珍しがられた。つまり、男ばかりの大学に女子学生として入学したことが珍しがられた時

代であつた。末乃はそんなことから客にかわいがられた。藤村もそのなかの一人で、やがて人を通して末乃を妻に、と申しこんできた。結婚後も大学には通つてよい、という条件だつた。そのとき藤村は三十七歳だつた。二人のとしがひらきすぎていることだけが難点だつたが、とにかく二人は結婚し、末乃は藤村家に入った。彼の家は本郷にあり、彼の父親は官立大学を停年退職した国文学者であつた。

末乃は、藤村家に興入れして三ヵ月目に中津に戻つた。権柄^{けんべ}づくな藤村の母とうまく行かなかつたのである。このとき末乃はすでに身籠^{みごも}つていた。

それからというもの、藤村は週のうち三日は中津で、三日は本郷で泊る、といった生活をしはじめた。そして、こんな生活を三年間続けたあげく、藤村は、ある日から突然現われなくなつた。やがてかつての媒酌人が中津にあらわれ、離婚話を持ちだした。末乃はすでに大学を卒業し、中津を手伝つていた。

着物を着おわつたら五時だつた。末乃は中津に電話をし、今日は店に行くのがすこし遅れるから、と伝え、それから家を出た。麻布のこの家は、五年前に、中津を広くするためを買つて越してきた古い家だつた。母と末乃と娘の京子と手伝女の四人が棲^すんでおり、末乃はときには中津で泊ることもあつた。父は末乃が三歳のとき亡くなつていたから、娘の京子も、ある意味では母の自分と同じめぐりあわせのもとにうまれてきた、と言えた。中

津には妹夫婦が棲んでいた。

藤村が手紙で指定してきた場所は赤坂の料亭だった。これだけ年月が経っているのに、なんのつもりで会いたいと言ってきたのだろう、まさか、いまになって京子をよこせと言うつもりではないだろうが……。藤村とのあいだには苦いおもいでしか残っていなかった。望まれて藤村家に興入れし、三ヵ月で生家に戻り、そして三年間、変則的な夫婦生活を続け、あבקに一方的に離縁されたのであった。青春のたのしさも結婚の飲びもない三年間であった。女の飲びもなかった。それを識ったのは三十四歳を過ぎてからであった。

指定された料亭の前で車からおり、玄関をはいった。

「久住末乃と申しますが、藤村先生に……」

出迎えの女を見て末乃は丁重に告げた。

通されたところは、控えの間つきの十畳の部屋で、藤村はすでに来ていた。

「もしかしたら来てくれないかと思ったが、よく来てくれたね」

藤村には懐かしいかも知れなかったが、末乃には苦いおもいでしか甦ってこなかった。

末乃は、すすめられた席につきながら、胸のなかで藤村のとしを数えた。五十四歳になるはずだった。

「あのときは、ああいう別れかたをしたが、もう親父もおふくろも墓にはいつてしまつて

ね……。あのときは申しわけないことをしたと思っっている」

空々しい言葉ではなかったが、末乃には響いてこなかった。

酒と料理が運ばれた。

「女将^{おかみ}。この人だよ、中津の女将は」

藤村は照れくさそうに料亭の女将に末乃を紹介した。

「まあ、そうでございますか。藤村先生からお噂はうけたまわっております。先生も、去年、奥さんをおなくしになられてからは、しきりとあなたさまのことを想いだされて、あのときは済まないことをした、とよくおっしゃっているのです。でございますよ」

五十がらみの粹な女将だった。そうだったのか、と末乃は女将の話をききながら、瞞着されたような気がしてきた。奥さんが亡くなったから繕^よりを戻してくれと言うのだろう……。それ以外にこんな場所であわねばならない理由は見つけだせなかった。藤村は中津には顔が出せなかった。藤村が勤めている大学の他の教師達も、二人が離婚してからは、自然と足が遠のいて行ったものであった。

末乃はだまって話をきいていた。女将のしゃべるのをききながら、末乃は堀場保成の顔をおもいかえしていたのである。今月もそろそろ上京してくる頃だった。

話はやはり、もう一度藤村の家に入ってくれないか、ということだった。おもに女将が

しゃべり、藤村が、まあそういうことだ、とときどき間を入れた。三人の子があるという。まだ小学生と中学生だが、もう手はかからない、とも言った。

「考えさせて戴きます」

最後まで末乃はだまって話をきき、こう返事をした。

「なるべく、早い返事が欲しいな」

藤村の物欲しそうな目を見たとき、末乃はひどい話だと思った。勝手すぎる話であった。まるで家全体が書庫のようになっていて、あの徴かひくさい本郷の家、そこでは、あの権柄かたがねづくの藤村の母の亡霊が待ちかまえているにちがいない、いまさら、わたしが、あそこに入らねばならない理由があるだろうか……。

末乃は藤村よりさきに料亭をでた。七時すこし前であつた。

三

蟬

中津は今夜も混んでいた。

末乃は勘定場になっている六畳の茶の間にはいり、今夜の顔ぶれを書きつけてある帳面を繰ってみた。そこへ妹の雪乃がはいってきた。

寒

「姉さん。堀場さん」

「あら、どの部屋？」

末乃は弾む心を抑えて妹を見上げた。

「六時頃いらして、御酒を二本召しあがり、珍しく冗談などをとばしてお帰りになったわ」

いつものホテルだろう、と末乃は胸なでおろし、しかし店じまい近くならないと出られないな、と思った。

「なんの話だったの？」

「奥さんが亡くなったから縫子を戻してくれって」

「馬鹿にしているわね」

「勝手すぎる話だわ」

「もちろんことわったでしょう」

「それでは角が立つから、考えさせてもらうと返事をしてきたわ」

「ばかねえ、姉さんも。その場でびしゃつとことわってやりやよかったのに」

妹はまるで自分にふりかかってきた粉をはらいのけるような口調だった。

「今夜も混んでいるわね」

「いいわよ、姉さん。お勝さんが風邪が直って出てきたから、大丈夫よ。桐の間にだけちょっと顔をだしてくださりゃいいわ」

「桐の間は誰方^{どなた}？」

「東西埠頭の常務さんが招待したお客さんが五人」

「ほかの部屋はどうなの？」

「今夜は後はみんな雑魚^{ざご}なの」

ひっこみ思案の姉に比べ、妹は江戸っ子気質で、亭主を尻に敷くくらいの働きぶりを見せていた。女子大時代に知りあった銀座の料亭の次男坊と結ばれ、いまでは中津の調理場は雪乃の亭主が庖丁をにぎっていた。

「お帰りなさいまし」

雪乃の亭主の益田亮吉が入ってきた。

「混んでいるようね」

「なあに、たいしたこたありません」

「雪乃は、桐の間だけ顔をだし、あとは雑魚だからいいと言ってるけど」

「それがこいつの悪いところですよ。お客さんを雑魚だなんて。姉さん、竹の間にもお顔をだしておくんない。学校時代の同級生で、陽明銀行の総務部長ですが、いずれは頭取